

# 成人聴覚障害者の音読および黙読の使用実態

○宮谷祐史

井坂行男

(大阪教育大学)

(大阪教育大学)

KEY WORDS: 聴覚障害 音読 黙読

## 1. 目的

聴覚障害教育における読解力の発達遅滞の問題は積年の課題である(井原ら, 1982)。読解力の向上には多くの文章に触れる機会を持つ必要があり、効率よく様々な文章に触れるためには、音読や黙読といった読み方を状況に合わせて選択することが重要である。本研究は聴覚障害者の学習活動に用いる読み方の使用頻度および使用状況の調査、②各読み方の使用効果の認識の検討、を目的として行う。  
※本実験は、大阪教育大学倫理委員会の承認を得ている。

## 2. 方法

(1)対象:すべての対象者に研究内容を説明し、同意を得た。  
**聴覚障害者群** 高等教育機関に在籍あるいは卒業した成人聴覚障害者 35名、平均年齢は23.9歳( $SD=5.7$ )であった。良聴耳の平均聴力レベルの平均は99.8dB(HL)( $SD=13.7$ )で70~130dB(HL)の範囲であった。  
**聴者群** 高等教育機関に在籍する59名、平均年齢は21.8歳( $SD=2.9$ )であった。

### (2)課題

**読み活動材料** 8文で構成されたオリジナル課題文(170~250字)の6種類から、2つをランダムに組み合わせた。

**読み方による効果認識に関する質問紙** 質問項目は高橋(2013)が挙げた「音読と黙読を行う状況」のキーワードを参考に、著者と大学教員で7項目を作成した。

**読み活動での読み方の実態に関する質問紙** この質問紙では2つのことを尋ねている。1つ目は、学習活動において音読と黙読の使用頻度を4件法で回答を求めた。2つ目は、音読と黙読を選択する状況について尋ねている。質問項目は、「音読と黙読を行う状況」のキーワード(高橋, 2013)を参考に、著者と大学教員で9項目を作成した。

(4)試行方法:音読と黙読の計2回の読み課題を個別あるいは少数で実施した。対象者は各読み方での課題終了時「読み方による効果認識に関する質問紙」、全課題終了時「普段の読み活動での読み方の実態に関する質問紙」に回答した。課題実施には20分程度の時間を要した。

## 3. 結果

### (1)音読と黙読の使用頻度

聴覚障害者と聴者の音読と黙読の使用頻度の各選択肢を選んだ人数をTable1に示した。使用頻度の平均点を算出し、二要因分散分析を行った。聴覚障害の有無と使用頻度に主効果が認められ(聴覚障害の有無: $F(1,92)=4.24, p<.05$ 、使用頻度: $F(1,92)=64.00, p<.01$ )、交互作用は認められなかった( $F(1,92)=1.03, ns.$ )。聴覚障害者は聴者同様に普段の学習活動では黙読を多く用いていることが示唆された。

### (2)音読と黙読の使用状況と使用効果の認識

音読と黙読の使用状況および使用効果の認識に関して選

択された回答比率について $\chi^2$ 検定を行い、有意差が認められたものはさらに残差分析を行った(Table2)。

聴覚障害者は音読・黙読間で使用状況および使用効果の認識に関して、聴者と比べて有意差が認められた項目が少なかった。つまり、聴覚障害者は使用効果に基づいて音読と黙読を使い分けていない可能性がある。この結果は、聴覚障害者に音読は運用困難な読み方であることを示唆している。聴覚障害者が音読を用いる難しさには、聴覚的フィードバックや構音運動の困難さ(我妻, 2008)が要因として考えられる。聴児は音読スキルを基礎として黙読を習得するが、聴覚障害児がどのように黙読を用いるようになるのか学齢期に焦点を当てて検討していく必要がある。他にも、成人聴覚障害者であっても用いる読み方の違いによる読解への影響を読み手自身が十分にメタ認知できていない可能性が考えられた。学齢期から読み方の特徴や有効性に気づかせるような指導者や周囲の大人の工夫が求められる。

Table1 「各読み方をどの程度行うか」の項目に対する回答比率(回答人数)

	聴覚障害者(n=35)				聴者(n=59)			
	O	S	R	N	O	S	R	N
音読	17(6)	17(6)	29(10)	37(13)	19(11)	25(15)	46(27)	10(6)
黙読	74(26)	14(5)	6(2)	6(2)	73(43)	17(10)	8(5)	2(1)

O:よくする、S:時々する、R:あまりしない、N:ほとんどしない

Table2 音読と黙読の使用状況と使用効果の認識に関する回答比率(回答人数)

	聴覚障害者(n=35)		聴者(n=59)	
	音読	黙読	音読	黙読
内容をしっかりと理解したいとき	26(9)	31(11)	44(26)	34(20)
内容を素早く理解したいとき	26(9)	37(13)	8(5)▽	49(29)▲
周囲に他人がいるとき	6(2)▲	60(21)▽	10(6)▲	71(42)▽
内容を記憶したいとき	46(16)	34(12)	75(44)▽	17(10)▲
内容が難しいとき	23(8)	29(10)	53(31)▽	15(9)▲
勉強するとき	40(14)	43(15)	34(20)▲	64(38)▽
集中したいとき	34(12)	51(18)	19(11)	22(13)
集中しているとき	26(9)▲	57(20)▽	44(26)▽	22(13)▲
難しい内容を頭で理解したいとき	40(14)	23(8)	10(6)▲	49(29)▽
文章を深く理解できた	34(12)	17(6)	27(16)	12(7)
文章のイメージができた	60(21)	60(21)	63(37)	66(39)
文章を覚えることができた	37(13)	31(11)	44(26)▽	12(7)▲
読みに集中することができた	54(19)	54(19)	41(24)▽	61(36)▲
どの単語を現在読んでいるのかより意識できた	49(17)	34(12)	51(30)▽	15(9)▲
頭を使った	23(8)	60(21)	37(22)▲	63(37)▽
素早く内容を理解できた	34(12)	31(11)	19(11)	29(17)

期待値よりも有意に多い(▽:  $p<.01$ , ▽:  $p<.05$ )、有意に少ない(▲:  $p<.01$ , ▲:  $p<.05$ )

## 5. 引用文献

我妻敏博(2008)聾学校における手話の使用状況に関する研究(3). ろう教育科学, 50, 77-91.

井原英二・草薙進郎・都築繁幸(1982)聴覚障害児の話し・読み・作文指導. 明治図書.

高橋(越野)麻衣子(2013)読解過程における音読と黙読の役割—音韻情報の処理に着目した実験的検討—. 東京大学博士論文.

(MIYATANI Masashi, ISAKA Yukio)